
きさらぎ駅

棒人間@TK_JS10_e2 Ms

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わからぬ駅

【Zコード】

Z9230Z

【作者名】

棒人間@TK-JS10-e2_MS

【あらすじ】

電車にいつも通り乗る彼女。

だがいつもと違う電車に乗ってしまったのだった。

(前書き)

宿題用の作品です。
何かを参考にして書くつゝす"じへ書きつい"事がわかりました。
自由がないと言つか

@以下の意味不明の文字列は事情により追加です。

いつものように帰りの電車に乗り込む女性。

今日は金曜日で明日は休みである。

その女性は明日はどうかと考えながら夢の世界へ踏み込んだ。

電車は規則的に音を刻みながら走っていく。

がたん、とん。

変わらずに。

がたん、じとん。

変わりなく。

彼女は微睡みの世界から帰つて来た様だ。

電車に乗り込んでから2時間後のことだった。

流石に彼女は焦つて立ち上がる。

窓の外は真つ暗で帰りの電車の途中にこんな真つ暗なところは通らないはず。

彼女以外の乗客は数名のみで皆泥の様に眠つていた。
訳の分からぬ電車、起きる気配の無い乗客。

電灯も無機質な光を放つのみになつていく。

車掌の居る運転室もブラインドが下げられ窓を叩くが応答はない。

焦りもだいぶ大きくなつてきた頃電車はトンネルに入った。
トンネルを通る路線じゃないにもかかわらずに。

トンネルを抜け、暫くすると駅に到着した。

とにかくこの異質な車内から脱出したかつた彼女は急いで外にでた。

駅の名は『きさらぎ駅』。

聞いた事もない。

彼女は逆方向に行く電車の時刻表を探した。
だが、見つからない。

どうしたもんか…。

ケータイを開くが圏外で助けも呼べない。
さつきの電車も行つてしまつた。

無人駅、電灯も朧げな光で頼りない。

さつきの車内を氣味が悪いと飛び出したくせに今度はさつきの車内に戻りたいと思い始めた。

さとうひが駅…。

さつきの電車はどこに行くのだろう。

確認してみた。

…。

…。

空白。

行き先不明。

さとうひが駅の前も後も駅名が書かれていない看板。

古くて消えたのではない。

本当に何も書かれていなかつた。

彼女は呆然とした。

ならば私はどこにいる、と。

一晩ここで過ごし朝ここを出ようとも考えたが、こんな訳のわから
ない無人駅にじつとしていられるほどの精神力を彼女は持ち合わせ
ていない。

この状況で動くにしても同等の精神力が必要だが。

彼女は動く方を取つた。

来た線路を逆走すると言つ方を。

怖い怖い怖い。
幻聴じゃない。
少しづづ近づいてきてる。

トンネルに入り歩き続けていたら、微かにだが太鼓や笛の音がした。
お祭りがどこか遠くでやっているのだろうか。
そこに行けば助けてもらえるかもしれない。
希望が少しだけ見えた。
そう思う彼女だった。

勿論彼女は歩き続いているのだから。祭囃子が近づいてくるのは当たり前だ。

だが違うのだ、彼女が言いたいのはそつじやない。

前に進む彼女。

音は後ろから段々と近づいてきていた。

あの音は祭囃子なんかじやなかつたらなんなんだ？

背中には汗が流れ、体はがくがくと震える。

脚に力が入らなくなってきた彼女だったが、気力を振り絞った。

更に進む彼女。

やはり近づいてくる音達。

どうしようも無くなり気が狂いそうになる。

もう彼女の心は既に限界だつた。

ついに膝をつき、地面に着いた手を見た。

もう私はここで終わるんだ、このまま倒れてしまおつか、と息も絶え絶えで前を見る。

もうすぐトンネルの出口のようだ。

更に人影のようなものが見えた。

彼女は最後の力を使い走り、その人に助けを求めた。いきなり泣きつかれた彼はさぞびっくりしただろう。こんな時間に真っ暗なトンネルの奥から走つて来られたのだから。

彼は人の良さそうな顔で彼女の話しを聞いた。

事情を知つた彼は近くの街まで車で送ると約束してくれた。

彼女は安堵のあまり彼に話しをし続けた。

彼も相槌を打ち話を聞き続けた。

暫くはなんの変わり無く話しが弾んでいた。

が、今はどうだ。

彼に話しかけてみても「ああ。」や「そう。」としか帰つてこない。

それだけでは無く、明らかに最初とは雰囲気が違う。電車内にいた時と同じ感覚が彼女を襲つた。

「次のニュースです。現在行方が分からなくなっている坂本ハス
ミさんですが、以前として行方がわかつていません。では最後の
ニュースです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230z/>

きさらぎ駅

2011年12月28日22時54分発行